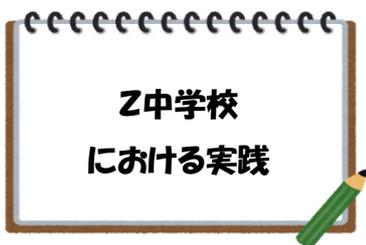


校内研究活性化プロジェクト研究通信

第12号 令和5年(2023年)11月7日発行

秋が深まり、木々も色づき始めました。実践校のみなさんにおかれましては、各行事にも尽力されていることと思います。プロ研通信第12号では、Z中学校にて10月中旬に設定された授業参観Weekの様子と10月25日(水)に開催された校内研究会の様子を併せてお伝えします。

校内研究主任の先生は、夏季休業中の校内研究会や10月中旬の授業参観Weekの前に「1学期に見えてきた課題を解決するための手立てをもって、2学期の実践に臨んでください」と、先生方に発信されていました。そのような準備と各取組の様子を、A先生(11月15日(水)に行われる研究授業の授業者)の学びを通してお伝えします。



Z中学校 研究主題

教科の指導と生徒指導の一体化

～生徒指導4つの視点の授業づくりで^{しな}やかな生徒を育む～

注目ポイント

課題解決を意識したA先生の学び

A先生の学びと実践の往還

A先生へのインタビューから、昨年度の学びと今年度の学びに向けた思いを紹介します。

昨年度～今年度当初

●昨年度の授業改善で意識したこと

言語活動を多く取り入れることで、生徒が積極的にやり取りする姿を目指しました。

●昨年度の実践を振り返って

言語活動を多く取り入れるだけでは、目指す生徒の姿は実現できなかった。生徒は授業の内容を理解できないことで不安感をもっているのはいかど感じました。

●今年度の校内研究に向けて

生徒指導提要に掲げられている生徒指導の四つの視点のうちの一つ「安全・安心な風土の醸成」を研究の柱とするグループに所属することにしました。そして、「安心して自分の考え・思いを発信できる授業」を目指し、外国語科の授業の中で、「学習したことを、生きた英語として会話に使う。スピーキングの機会をもっと取り入れる」ことを意識して授業改善に取り組むことにしました(図1)。



A先生(外国語科担当)

授業アップデート					
校内研究の主題		教科の指導と生徒指導の一体化 ～生徒指導の4つの視点の授業づくりで ^{しな} やかな生徒を育む～			
グループのテーマ		「安心して自分の考え・思いを発信できる授業」			
個人のテーマ		安心して自分の考え・思いを発信できる授業			
授業に関する自分の強み・課題					
強み					
課題 学習活動と、生徒英語を会話に使う、スピーキングの機会をもっと取り入れる。					
日付	校内研究授業実践	自分のめあて	学んだこと (児童生徒の様子・新たな発見など)	具体的に取組むこと (時・場・方法など)	自己評価 (成長・進捗状況など)
5/24	第1回校内研究会	今年度の校内研究のゴールを確認する。ゴールに向かう手立てを見つける。	生徒は、安心して自分の考え・思いを発信できる授業が重要である。	仲間の発表を前向きに聞く姿勢を身につける。	個人・ペアが明確に持っていた。

図1 A先生の「授業アップデートシート」(一部)

1学期の取組と生徒の反応

- 4月 「授業の理解度が高まれば、生徒は安心して自分の考え・思いを発信できるだろう」という仮説を立て、ヒントを出すなど話し手がわかることを意識して授業改善に取り組んだ。
- 5月 校内研究会で「生徒にとって安心できる授業は、発信だけでなく受信が重要」と学び、「仲間の発表を前向きに聞く姿勢」が身に付けられるような指導を日常的に行うことを決めた。
- 6月 校内研究会では、安心という言葉の捉え方を見直し、学級全体で考えを共有できるような展開に取り組むことにした。



- 7月 全生徒・全教科を対象としたアンケートを全校的に実施した。
- 8月 A先生の授業に対するアンケートの結果から「まだまだ不安を抱えている生徒が多い」「間違えた後の雰囲気に対する恐怖心が強そう」という生徒の現状が見えてきた。

2学期の授業参観Weekの様子

授業参観Weekにおいて、同じ校内研究のグループテーマを選択したメンバーの授業を参観し、学ばれたことを紹介します。



B先生(授業者)

●授業について

教 科：体育（バレーボール）

学 年：第2学年（参観させていただいた授業は、1学級の女子のみで実施された）

ね ら い：3段攻撃ができる。動きやプレーを見てアドバイスできる。

ポイント：互いの動きやプレーを見る。3段攻撃。ゲームの運営。

●授業者の思い

運動が苦手な生徒も参加しやすい授業づくりのために、前年度のプレーや前回のプレーと比べて、できるようになったこと、上達したことなどを見取って声をかける。

●授業の流れ

①挨拶・出欠確認・ランニング・ラジオ体操（全体での活動）

B先生の工夫ポイント1
生徒が「見てもらっている」と感じられるように声掛けすることで、安心感を生み出す。

②スキルアップタイム（2人1組のペア活動）

30秒間、一人の生徒が直上パス（真上にボールを上げるプレー）を続け、ペアの生徒はプレーを観察する。その後、観察していた生徒が、プレーしていた生徒にアドバイスをする。伝え終えたら役割を交代してもう一度行う。

B先生の工夫ポイント2
生徒同士でアドバイスすることで、ペアのプレーを見る必然性を生み出し、見てもらっている安心感を生み出す。

③チームで3対1（4人1組のグループ活動）

ネットを挟んで3人と1人に分かれる。1人になった生徒がサーブし、3人になった生徒はレシーブ・トス・アタックの3段攻撃をする。2～3回サーブをしたら役割を交代する。

④ゲーム（全体での活動）

全体を3チームに分けて（4人1組の時と同じグループ）、総当たり戦を行う。ゲームをしないグループは、審判を務めるなどの運営を行い、ゲーム終了後はゲームをしていた2チームに対してアドバイスをする。

B先生の工夫ポイント3
工夫ポイント2と同じ意図で、プレーを見る必然性を生み出し、見てもらっている安心感を生み出す。

●B先生の学び

生徒はのびのびとプレーしていて、サーブやレシーブでミスをしていても笑顔でした。そして、ミスをした後のプレーも変わらずのびのびとしていました。ミスをしていてもあたたかく受け止めもらえるという安心感をもってプレーしていると感じました。この姿は自身が目指す理想の生徒の姿で、この雰囲気をつくるためにどうしたらよいか、すごく考えさせられました。

10月25日(水)の校内研究会の様子

校内研究会の取組と教員の学びを紹介します。

校内研究会のめあて
公開授業を振り返り、
自分の授業研究に生かす



校内研究全体会の様子

校内研究会の流れ

1. 校長先生より
2. 授業参観の振り返り(グループ協議)
3. 授業参観の振り返り(ワールドカフェ)
4. 各グループからの発表(2グループ)
5. 前期校内研究の振り返りと今後について
6. MVGの発表
(MVGとは、Most Valuable Groupのこと)
7. 研究発表大会、指導案検討会(理科・英語・国語)
*提示されたスライドを基に研究員が作成

2. 授業参観の振り返り(グループ協議)における「安心・安全な風土の醸成」を目指したグループの様子

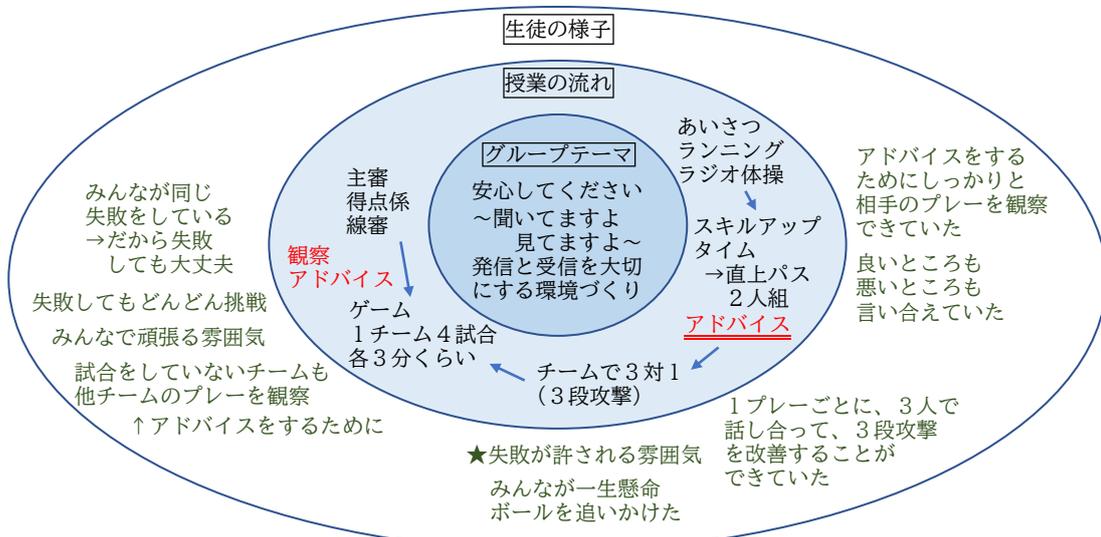


図2 A先生が所属したグループの「えんたくん」に書かれた内容 (実際の「えんたくん」の記述を基に研究員が作成)

ここでのグループ活動は、授業を振り返りながら「えんたくん」に書き込んでいく活動が行われました(図2)。

はじめにメンバーでグループテーマを中心に書いていきました。グループテーマを書くことでテーマを確認でき、生徒の様子を交流する視点が焦点化されたと感じました。それから、授業者が中心となって授業の流れを書いていきました。A先生が所属するグループは、授業者1名、参観者1名で、参観していない先生が3名おられたので、授業や生徒の様子を具体的にイメージできるように随時質問を挟みながら進められていました。例えば、授業者が、「ゲームで主審、得点係、線審をしているチームは、ゲーム中に他のチームのプレーを観察して、ゲーム終了後にアドバイスをするように指示しました」と授業の流れを伝えると、参観していない先生から「どんなアドバイスがあったんですか?」と具体的なアドバイスの内容を尋ねる質問がありました。また、参観者が「失敗が許される雰囲気がありました」と生徒の様子を伝えると、参観していない先生から「失敗しても『ドンマイ、ドンマイ』という感じで、失敗を受け止めてもらえる雰囲気があったということですか?」と生徒の様子をより具体的にイメージするための質問がありました。このような主体的なやりとりが随所に見られました。

3. 授業参観の振り返り(ワールドカフェ)における「安心・安全な風土の醸成」を目指したグループの様子

ワールドカフェ形式で、「2. 授業の振り返り(グループ協議)」の様子が交流されました。メンバーを2度入れ替えて振り返りの内容を交流した後、元のグループに戻って学んだことを共有するという流れで行われました(図3)。



図3 「えんたくん」を使った交流の様子

共有の場面で、他グループの学びについて、『自己決定の場の提供』のために『仕掛ける』をテーマとしたグループでは、『3年生の外国語科の授業で、関係代名詞の単元の第1時に英語でフルーツバスケットをするという活動を仕掛けた。生徒が言った言葉を板書するという支援をすることで、誰も固まることなく全員英語でできた』という話を聞いた。真ん中に行くことになった生徒は固まってしまうと思ったのに意外だった』という報告がありました。これに対して、「前の生徒が言ったフレーズが、真ん中に行くことになった生徒のヒントになっているのだろう」「やることがパターン化されて見えるのは安心につながるのだろう」など、グループのテーマと結び付けたコメントが聞かれたので、自身が学びたい視点から捉え直すことができているのだと分かりました。つまり、グループのテーマが明確で焦点化されていれば、異なるテーマで学んだことを聞いても、テーマに沿って学びを深めることができるのだと感じました。

5. 前期校内研究の振り返りと今後について

校内研究省察ポスターに取り上げた一人の先生の学びを、校内研究主任自身の学び、教頭先生の校内研究会で話された内容などと結び付けて、校内研究主任が紹介しました。また、校内研究省察ポスターの紹介を通して、教員の「個別最適な学び」「協働的な学び」目指すことの大切さをはじめ、校内研究主任が校内研究で大切にしてきた取組のポイントとなる部分についても伝えられていました。

全体会の後、校内研究省察ポスターを見ながら話す4人の先生の姿を見つけました。一人の先生が、『個別最適な学び』をいかに充実させるかが難しい』と言い、他の3人の先生とやりとりをされていました(図4)。校内研究省察ポスターも、校内研究全体会も同じですが、校内研究主任の取組がきっかけとなって先生方の学びが広がっていくのは、とても素敵なことだと感じます。



図4 校内研究省察ポスターを見て話す先生方の様子

全体会の後、今日のめあてを確認してから、「振り返りシート」と「授業アップデートシート」を記入する時間を取られていました。授業でも大事だと言われる「最後にもう一度めあてを確認する」「振り返りの時間をきちんと取る」を確実にされていて、先生方の学びをより確かなものにしようという校内研究主任の仕掛けを見つけることができました。



7. 研究発表大会、指導案検討会(英語)

校内研究主任は、「プロジェクト研究会で得た情報から、小学校での取組を真似して取り入れた初めての試み」として、全体会の後に11月の研究授業の指導案検討会(メンバーは教科担当)を設定されました。

検討会の流れ 1. A先生が現在の指導案について説明
2. 授業内容の検討

A先生は、今回の研究授業で<疑問詞+to>の文法を使って、「ユニバーサル・デザインのことを英語で紹介してみよう」と自身が興味のあるものを英語で紹介する授業を計画しています。その際、「安心して学習できる環境づくり」にも力を入れて、所属する「安心・安全な風土の醸成」というグループの目標の達成を目指しています。しかし、「安心して学習できる支援」は、日常的な取組として行っているものの、研究授業の支援として、その場で成果が見取れるように指導案に盛り込むことに難しさを感じていました。検討会では、「言語活動の充実」と「安心して学習できる支援のあり方」を中心に協議が進められました。



指導内容の説明をするA先生

「言語活動の充実」については、「商品紹介は、生徒が主体性をもって取り組めるのがよいと思った。ただ、班になって人数が増え、役割が明確化すると英語で紹介の仕方を考える機会をもてない生徒が出てくるのももったいないと感じる。どの子にも考えるチャンスがあるとよいと思う」などの意見が挙がりました。また、「安心して学習できる支援のあり方」については、「安心して日々の取組の積み重ねから生まれてくると思うので、お互い安心して話し合っているということを見ている側から理解できたらよいと思う。引っ張り出すものではないから、にじみ出てくるものをこちら側が感じられたらよい。安心・安全を強制すると変な話にもなるし、今までの積み重ねがこうですよということをもみんなにアピールしてくれたらそれでよいと思う」などの意見が挙がりました。

指導案検討会の後、A先生に「初めての指導案検討会はどうでしたか？」と尋ねると、「とても勉強になって助かった。授業公開日までもう少し時間があるので、今日聞いたことを基に、困ったことがあれば相談して授業内容を決めていきたい」という思いを語ってくださいました。校内研究主任が指導案検討会に込めた思いを、A先生がしっかりと受け止めてZ中学校の研究発表大会へとつないでいく一場面を見せていただきました。

Z中学校の校内研究会の参観を終えて

1学期に見せていただいた校内研究会はとても活気があって素晴らしかったです。そして、今回見せていただいた校内研究会は、活気に加えて深まりが出てきたと感じました。校内研究会終了後、校長先生にそのことをお伝えすると、校長先生からも「教頭先生、校内研究主任ともちょうど同じ話をしていたところでした」とうかがいました。

校内研究主任は、今回の校内研究会のために、夏休みの校内研究会で「1学期の振り返りを生かした授業改善に取り組んでください」と伝え、10月中旬の授業参観Weekを設定されていました。今回の校内研究会に向けて、2か月前から準備をされていたことになります。さらに、「2学期の取組の流れを1学期の取組の流れと同じにすることで、他の先生方は『1学期と同じことをすればよいから簡単だ』と感じていると思います」とも語ってくださいました。

今回の校内研究会やその後の先生方の自主的に学び続ける姿は、「新たな教師の学びの姿」そのもので、それを支えている大きな柱の一つが校内研究主任の「準備」だと感じました。



研究員 稲益 圭吾



研究員 島内 祐翔